

# 後輩たちへのエール！ その19

2020年5月12日

## 面白がる力

◇今回は、清水俊介さん（新聞社政治部記者）のエールです！

私は1995年の卒業で、現在、43歳。この文章を読むかもしれない皆さんにとっては、ちょうどお父様くらいの年齢です。父親と同世代のおっさんから「こうしたほうがいい」「ああするとうまくいく」とアドバイス込みのエールを送られたところで、どうしても、説教臭さが漂ってしまいます。ですので、仕事の紹介と進路の選択を軸にした文章を淡々と書いて、「後輩たちへのエール」の隊列に加わらせていただきます。

### 【みんな混乱している】

私は現在、新聞社の政治部で記者をしています。皆さんの自宅でとっている（かな？）新聞の1面～3面あたりで、国政に関する記事を書いています。たまに、署名記事も載っています。

政治記者の仕事をものすごくざっくり言うと、国会議員や国家公務員の話聞いて、政府がどのようなことを進めようとしているのかをわかりやすく読者に伝える、というものです。政府が進める政策は、多かれ少なかれ、国民（つまり、皆さん）の生活にかかわってきます。今回のコロナ禍にあっては、政府の方針はダイレクトに国民の生活に重大な影響を与えています。よく「第二次世界大戦以来の危機」と言われますが、それくらいの大混乱の時代を私たちは生きていることになりま。皆さんも、全国一斉休校やら緊急事態宣言やらで、想定していた生活が送れずに混乱していると思います。政府の偉いたちも皆さんと同様、今まで経験したことのない事態に右往左往しています。それは、我が国の首相も、です。給食用マスク（じゃなくて、布製マスク）を日本中の全世帯に配るなんていうぶっ飛んだアイデア（というか政策）は、右往左往している時でなければ、出てきません。

今は政府も混乱しているので、それを報道するマスコミも混乱し、多忙な毎日を送っています。



記者会見で安倍晋三首相に質問

## 【政治記者のお仕事】

私が考える新聞の役割というのは、堅苦しく言えば、「健全な民主主義に貢献する」というものです。日々の政治報道というのは、つまるところ、次の国政選挙に向けて、判断材料を提供することにあります。国民は、選挙を通して自分たちの代表を選び、国の統治を任せます。これを「議会制民主主義」と言います。イマイチな統治を行う代表がいたら、次の選挙で自分たちの代表を引きずり下ろせるのです。日々の報道というのは、その判断材料になる



のです。記者は、民主主義を健全に機能させるために協力する仕事でもあると思っています。選挙の時には、とりわけ心を込めて、各政党や各候補の政策を読者に伝え、投票の役に立ててもらおうと思っています。

選挙にはあまり関係ないかもしれませんが、外交も取材します。日本と外国との関係も、結果的に自分たちの生活に影響するからです。政治記者は時々、首相の外遊について行ったりもします。

G7サミット、APECなど国際会議の取材パス

## 【実際のところ…】

ところで、新聞もテレビも最近、「マスゴミ」などと称され、評判が良くありません。自分たちの都合の良いように事実をねじ曲げて報道しているという批判も受けます。多くの人がネットで情報収集できる時代、新聞やテレビのニュースを見ない人が増えています。しかし、どんなにたくさんの情報があふれても、新聞やテレビのオールドメディアは、当事者たちから取材して、編集して、信頼できるニュースの発信につとめているつもりです。コロナ渦で虚実ない交ぜ、いろんな情報が飛び交う昨今、きちんと取材して、編集された報道というのは、いっそう重要になっていると感じます。

政治記者の仕事の意義や、マスゴミへの批判は横に置いておいて、この仕事はなかなか楽しいものです。私が日々働いている場所は、首相官邸や国会議事堂、自民党本部などです。日中は、記者会見や発表資料などをもとに記事を書き、(今は夜の町に出られませんが)夜は政治家や官僚と食事をしながら、情報交換、意見交換などをします。

取材する側とされる側の適度な距離感が必要ですが、記者は取材相手と人間関係を築き、情報を取る仕事でもあります。「人間関係を築く」という表現が大げさであれば、「友達になる」という表現に置き換えてもいいです。新聞社やテレビ局の記者は、政治部なら政治家、運動部ならスポーツ選手、放送芸能部なら俳優やミュージシャンなどと友達になることも仕事、とも言えます。「健全な民主主義の一翼を担う」「権力をチェックする」というのは立派な建前ですが、実際は、「有名な人と友達になれるかも」というヨコシマな動機も仕事の

モチベーションになっています。

どうでしょう。記者という仕事に少しでも興味がわくのでしょうか？

### 【なりたい仕事は、特になかった】

皆さんは今、「将来、この職業に就きたい」とか、「こういう研究がしたい」という目標はあるでしょうか？ あるとしたら、それは素晴らしいことです。けれども、目標がなくても気にする必要は全くありません。ないことのほうが普通だと思います。私も高校時代、自分が記者になって、文章を書くことを仕事にするなんて、全く想像もしていませんでした。高校時代、参考書を読むことはあっても、読書はほとんどしていませんでした。ゆえに、国語は苦手科目の筆頭、特に作文が嫌いでした。読書量の多い友人や、上手な文章を書く同級生に尊敬の念を持っていました。でも、今、文章を書く仕事をしています。



では、高校時代、何を考えていたか？

「とりあえず、大学に行ってから考えよう」です。

ホワイトハウスで日米首脳会談を取材。トランプ大統領の後頭部を至近で。

### 【「多様性」で拾われて】

大学に入ってから、周りに公務員志望が多く、自分も公務員になるのかな、と漠然と考えていました。が、大学3年の秋に、ちょっとした転機がありました。

私が入った大学の入った学部は、とにかく大教室の授業が多く、教授と学生の人間関係も希薄でした。少人数のゼミも必修ではありませんでした。どの教授とも親しくならず卒業してしまう可能性もあります。「それはもったいない」と思い、大学3年の後期、ある政治学のゼミに申し込みました。

ゼミには定員があります。申込者が多数の場合、選抜となります。私が申し込んだゼミは、教授が風変わりな経歴の持ち主だったこともあり、人気を集めました。ゼミの選抜は基本的に、成績上位順です。それが、大学入試をはじめとした多くの競争のルールです。自分は、大学に入れた途端、学業よりサークルとかバイトに精を出すという、いかにも90年代的な学生生活だったので、成績は芳しいものではありませんでした。成績上位から選ばれたら、落選間違いなしです。それでも、所属ゼミ発表の日、希望した政治学のゼミの名簿に私の名前がありました。

ゼミの初日、その理由が判明しました。ゼミの冒頭、教授は言いました。

「このゼミの競争率は3倍でした。公平な選考であれば成績順ですが、私は成績順にしませんでした。社会は多様性で成り立っています。多様性というのは大事な価値です。ゼミとい

う集団もできるだけ社会の縮図であることが必要です。選考にあたっては、成績上位から3分の1、成績中位から3分の1、成績下位から3分の1、選びました」

多様性が社会を強くする、というのが、教授の信念でした。大学のゼミという、20人程度の狭い集団においても、教授は多様性を重視したのです。なんだか感動しました。それまで勉強をしていなかったのに、多様性という価値観だけで、人気ゼミに潜り込めたのです。多様性は、素晴らしい。多様性は、美しい。多様性、サイコー。今でも、私のちょっとした信念にもなっています。人の集まりには、いろんな種類の人がいたほうがいい。そんな素敵な価値観に出会えました。

その政治学のゼミは、90年代中盤にできては消えていった新党を研究テーマにしました。教官のツテで、ゼミで研究したことが、本（学術書）という形で出版されることになりました。たかだか大学3年生が書いた文章が、学術書とはいえ、世に出るのです。自分の書いた文章が世に出る、という事実は何とも言えない魅力を感じました。人の集まりに生きていく以上、自分の作業が誰かの目に止まってほしい、誰かに褒められたらうれしい、というのは、否定しがたい感情です。そんなこんなで、自分の書いたゼミ論文が世に出るという、予想外の経験もしました。

加えて、ゼミには某新聞社のベテラン記者が講師として参加していました。ベテラン記者の人脈で、首相経験者など数多くの大物政治家がゲスト講師に招かれました。ベテラン記者が大物政治家と親しげに話している姿を見て、ただただ、カッコいいと思いました。「政治記者は、国を動かす人たちと友達になれる。自分の文章も多くの人に読んでもらえる。すごい」というのが、大学3年の秋に抱いた、偽らざるミーハーな感情。どうせ、仕事をするのなら、こんな面白そうな仕事がしたい。

大学のゼミでの出会いがきっかけとなり、今に至ります。

### 【一步を踏み出すには…】

冷静に振り返ってみれば、成績の「上・中・下」から3分の1ずつ選ぶという理屈はわかりませんが、「下」に属する人の中から、私はどうやって選ばれたのでしょうか？そこは今となってはわかりません。たぶん、運でしかないでしょう。でも、その運に行き着く最初の一歩は、「面白そう」と思って、そのゼミに申し込んだことです。

大学は、学問を身につけるための場所ではありますが、目標もなく漫然と入学した人にとって、人生を方向付けるような面白い人、本、経験、価値観、考え方に出くわすためにある場所だとも思います。そうだとすると、もはや、大学のレベルとかは関係ありません。大学のレベルに比例して、出会いの質が高くなるというわけではありません。他の人にとって魅力的な出会いが、自分にとっても同じように魅力的なわけではありません。どのような人の集まりにも、魅力的な人はいます。刺激は常に、自分の外にあります。

皆さんがこの先進んでいくであろう大学という場所には、関市では出会えないような人が、いろんなどころから集まってきます。そこでの人のつながりが、新たなつながりと呼んで、皆さんを想像もしなかったような場所に連れて行ってくれるはずです。逆もまた然り。皆さんが人の集まりの貴重な一部（多様性の一部）となって、他の人にとっての刺激になり

ます。ひょっとしたら、関高校のクラスの中にも、自分の人生にとって少なからぬ影響を与える友達がいて、すでに出会っているかもしれません。

人との出会いであれ、本との出会いであれ、出来事との出会いであれ、その多くは自分から踏み出してみないと始まりません。そして、踏み出すきっかけは、興味を持つこと。興味を持つその根源には、「面白そう」「楽しそう」と感じる心があります。自分にとって「面白そう」と思える人や、「楽しそう」と思えるモノゴト、それらがありそうな場所…。そうしたものを感じ取れる心。そう難しいことではありません。直感みたいなものです。面白がる心、楽しめる心があれば、そこから何か動き出します。

### 【関高生なら大丈夫】

面白がる心、楽しめる心というのは、大事な能力であると信じます。コロナ禍の大混乱な時代にあっても、です。みんなが不安で、みんなが戸惑っている時代に、いささか不謹慎な表現ですが、面白がるネタは尽きないと思います。

で、ここで、「皆さん、面白がる心を大事にしてください」と伝えるのは、無粋です。とたんに説教臭くなります。そんなことを書く必要は、ありません。

たぶん、大丈夫。

関高校に通っている皆さんには、面白そうなものをきちんと面白いと感じられる感性の素地も、その感性を出発点に目標を掲げ、その目標に向かって努力する素地も、きちんと備わっています。

面白がる力が、この先、皆さんのよい出会いにつながっていきますように。